

ポール・クロードルと関大ゆかりの人びと

―パリ・東京・千里山をつなぐ人脈相関図―

浜 本 隆 志

目 次

1 二人の外交官の細い糸

- 1 二人の外交官の細い糸
- 2 クロードルと姉カミーユ
- 3 クロードルと日本
- 4 関西大学昇格記念のクロードルの講演と文学科開設
- 5 宮島綱男と関西大学
- 6 フランス文学者河盛好藏と関西大学
- 7 宮島の盟友・服部嘉香と学歌制定
- 8 服部嘉香と大正ロマンの世界
- 9 宮島綱男の再登板
- 10 クロードルのメッセージ「関西大学の学生諸君に」
- 11 国際派としてのクロードルと宮島綱男
- 12 交差するヨーロッパ精神と日本精神

ポール・クロードル（一八六八―一九五五、フランスの作家、外交官）と関西大学との関係は、文学部の旧フランス文学科の年配の先生方にとっては、周知の事実であったという。しかし現在の文学部教員のなかでは、クロードルが文学部開設の功労者であったことを知る人は、わずかなを除きほとんどいない状態であり、かくいう筆者も、文学部に三十有余年奉職していても、恥ずかしながら同様であった。関西大学の年史にはクロードルは登場し、断片的に記録されているが、現時点では歴史の闇に埋もれそうになっているといわざるをえない。全学的に

見ても、この状況には変わりがないであろう。

まず個人的なクローデルとの接点から稿を起こしたい。

発端は筆者が『EUと日本学』（関西大学出版部二〇一二年三月刊行）の編者のひとりとして、「〔EUの父〕リヒャルト・クーデンホーフ＝カレルギー」論を書いたことにある。かれは第一次・第二次世界大戦の狭間に平和運動を展開し、EUのルーツともいえる「パン・ヨーロッパ運動」（ヨーロッパ連合創設運動）を提唱したことで知られる。この運動の素地がなかったなら、今日のEUがどう展開したかわからないともいわれ、それほどかれは歴史的に重要な役割をはたした人物である。

リヒャルト（一八九四―一九七二）の父ハインリヒ（一八五九―一九〇六）は、オーストリア・ハンガリー帝国の伯爵であり外交官であった。日本行きを希望していたハインリヒは、願いがかなえられ、帝国皇帝フランツ・ヨーゼフの命をうけ、一八九二年二月末に東京へ代理公使として赴任した。かれはその約十カ月前に起きた、大津事件（ロシア皇太子ニコライ襲撃事件、本学の創設に参画した児島惟謙の名判決は有名）を聞いていたが、日

本へやってきたときには、もちろん世界を震撼させた事件は収束していた。

ただし外交官として、この種の事件の背景を調査し、極東の動向を分析することがかれの職務の重要な一部であった。大津事件の前に、ニコライ皇太子来日の警備体制について、時の外務大臣青木周蔵（かつてはドイツ公使、オーストリア・ハンガリー帝国兼任公使などを歴任）は、ロシアの駐日公使シエーヴツと打ち合わせをおこない、万全を期す旨を約束していた。このやり取りが、犯人津田三蔵の死刑要求の根拠となり、ロシア公使の恫喝的な言動につながったことはよく知られている。

ところが以前から、両者の関係は不仲であり、それが夫人の身分に一因があったという。つまり、大津事件の責任者の外務大臣、青木の妻エリーザベトはドイツ名門貴族（伯爵）出身であったのに対し、ロシア公使の妻がロシアの貴族ではなかった。ドイツ人は肩書きを重視する民族であるので、自尊心の強いエリーザベトがロシア公使夫人を見下し、ギクシヤクした関係が生じたという説がある（木村毅『クーデンホーフ光子伝』鹿島出版会参照）。

事実、皇居の宮中では各外交官は夫婦で儀礼に出席したので、顔をあわす機会は比較的多かった。大津事件をめぐる日露関係に、青木外務大臣とロシア公使の夫人たちがどこまで影響を与えたかは、今となつては推測するしかない。いずれにせよ、大津事件は当時の大審院長、児島惟謙が犯人津田に対する強い死刑論を排し、終身刑を下した有名な判決と、青木外務大臣の引責辞任によつて収束することになる。

事件は重大であつたが、ただそれだけのことなら、これはハインリヒに直接関係のない歴史的事実で終わるものであつた。しかしかれは東京へ赴任後、美貌で評判の青山光子とスピード結婚をした。すなわち光子は外交官夫人となるが、彼女の実家は「平民」であつた。貴族と「平民」との結婚は、当時やはり大きな問題で、大津事件で顕在化した夫人の確執を念頭に置いたハインリヒは、周到な予防線を張つて妻光子をかばい、「もしわが妻に対し、ヨーロッパ女性に対すると同等の取り扱い以外を示す者には、何人を問わずピストルによる決闘をいどむ」（木村毅『クーデンホーフ光子伝』）と東京在任の外交官

に公言した。

もちろん決闘事件が起こることはなかったが、人種や身分の差を問題にしないハインリヒは、差別をもちだすことを警告したのである。このエピソードは、こじつけに見えるかもしれないが、かれが児島惟謙と間接的にかかわつた事例といえる。ハインリヒと光子は、日本では二人の男子を設け、次男として東京で生まれたのが、冒頭の「パン・ヨーロッパ運動」を提唱したリヒャルトであつた。かれは日本人を母にもち、日本名では青山栄次郎と名づけられた。

やがて一八九六年に父親に召還命令がくだり、家族はオーストリア・ハンガリー帝国へ帰国することになった。リヒャルトは少年時代に、父の居城のあつたボヘミアのロンスベルク城で成長したが、父親は四十七歳で突然死去してしまふ。光子は夫の死後、七人の子供たちを連れてウィーンへ移住し、リヒャルトはウィーン大学で学んだ。その後、かれは第一次世界大戦の惨状を見て、一九二一年に「パン・ヨーロッパ運動」を提唱し、一躍ヨーロッパで有名人になった。



母光子



リヒルト・クーデンホーフ＝カレルギー

一九二六年にウィーンではじめて「パン・ヨーロッパユニオン」の国際集會が開かれたが、そこには二十六カ国、約二千人の各国代表が集まった。運動方針案が採択され、中央議会の議長に弱冠三十二歳のリヒルトが選出された。かれの「自由、平和、繁榮」という理念は大きな反響を呼び、各国の政治家、文学者、著名人も賛同した。一年半後には、この「パン・ヨーロッパ運動」に賛同する人たちが、ヨーロッパ中に拡大した。そのうちリヒルトは、運動の協力者としてクロードルを筆頭に挙げ、有名な文化人を列挙しているので、その一部だけ抜粋しておこう。

ポール・クロードル（フランスの作家、外交官）、ポール・ヴァレリー（フランスの作家）、トーマス・マン（ドイツのノーベル文学賞作家）、ライナー・マリア・リルケ（詩人）、シュテファン・ツヴァイク（オーストリアのユダヤ系作家）、フリッツ・フォン・ウンルー（ドイツの劇作家）、ジグムント・フロイト（ユダヤ人、オーストリアの精神分析学者）、アルベ

ルト・アインシュタイン（ユダヤ人、ノーベル物理学賞受賞者）、ブルノー・ヴァルター（ユダヤ系ドイツの指揮者）など（括弧内説明は筆者加筆）。

ハインリヒの息子リヒャルトとフランス外交官のクロデルを結びつけたのは、時のフランス外務大臣、アリストイード・ブリアン（一八六二—一九三二、後の首相、ノーベル賞受賞）であった。外交官として外国に赴任したクロデルは、上司に当たるブリアンをはじめ外務省へ、外地（東京および赴任地）からたえず外交情報を送付していた。そのつながりからクロデルは、リヒャルトの「パン・ヨーロッパ運動」をブリアンという外務大臣を通じて知り、その影響でこの運動に賛同したものと考えられる。こうしてリヒャルトの父である外交官ハインリヒは、息子を通じて間接的ではあるが、外交官クロデルとの細いパイプができるのである。しかもハインリヒ、リヒャルト、クロデルとの関係は、奇しくも日本が媒介の仲立ちをしたことになる。

さて、賛同した人びとのうち二番目のポール・ヴァレ

リーは、クロデルの親友であった。これらのうちクロデルだけでなく、シュテファン・ツヴァイク、フリッツ・フォン・ウンルー、アインシュタイン、ブルノー・ヴァルターらは、後に「ロマン・ロラン友の会」でつながり、ここから本学の宮島綱男（教授、専務理事、後に理事長）との接点が生まれてくるのである。

その他、政治家も先述のフランスのブリアンだけでなく、エドヴァルト・ベネシュ（後のチェコスロヴァキア大統領）、エドゥアール・エリオ（後のフランス首相）なども、「パン・ヨーロッパ運動」に賛同した。当時のヨーロッパの錚々たる知識人がリヒャルトの運動を支持しているが、共通項としてかれらの多くはインターナショナルな視野をもち、後にナチスと対立したので、迫害や亡命、弾圧を経験している点を指摘できよう。

さて筆者が昨年の十二月に、先述の『EUと日本学』の拙論を校正していたとき、その出版を担当していた関西大学出版部の藤原有和氏から、本文で触れたクロデルが、関西大学とご縁のある人物であることを教示された。さっそく年史編集室で資料を調べると、関大の事情

クローデル、関西大学関係略史

1864	カミーユ・クローデル誕生
1868	ポール・クローデル誕生
1884	宮島綱男誕生
1886	服部嘉香誕生
1889	フランス人法律家ボアソナード来学
1890	クローデル外交官試験に首席で合格
1894	リヒャルト・クーデンホーフ＝カレル ギー誕生
1913	宮島 早稲田大学教授
1914-18	第一次世界大戦
1917	「早稲田騒動」により宮島 早稲田大 学教授罷免
1917	服部 早稲田大学講師辞任
1917	「早稲田騒動」収束
1921	岩崎卯一教授就任
1921	宮島 関西大学教授就任
1921	服部 関西大学講師就任
1921	リヒャルトのパン・ヨーロッパ運動開始
1921	クローデル駐日大使赴任
1922	山岡順太郎関西大学総理事就任
1922	宮島 関西大学専務理事就任
1922	クローデル関西大学にて講演
1922	関西大学新大学令にて昇格
1922	アインシュタイン来日
1923	山岡 学長兼務
1923	関西大学学歌制定
1924	関西大学専門部文学科設置
1925	服部 関西大学教授辞任
1926	河盛好蔵関西大学講師就任
1927	関西日仏学館設置
1927	クローデル、アメリカ駐在大使へ転任
1927	宮島 関西大学専務理事・教授辞任
1928	河盛 関西大学講師辞任
1935	クローデル外交官退任
1941-45	太平洋戦争
1943	カミーユ死去
1944	ロマン・ロラン死去
1947	岩崎卯一関西大学学長就任
1947	宮島 関西大学理事就任
1948	宮島 関西大学理事長就任
1949	日本「ロマン・ロラン友の会」設置
1951	クローデルのメッセージ「関西大学の 学生諸君に」
1952	宮島 排斥運動
1952	久井忠雄関西大学専務理事就任
1955	クローデル死去
1963	久井 理事長就任
1965	宮島 死去
1975	服部 死去

通には常識となつていふことはいふ、本学の元理事長・宮島綱男がクローデルとの接点となり、かれの人脈が学歌の作詞者服部嘉香（本学講師、教授）、その友人たちへと、次つぎ辛づる式に広がつてゐることがわかつた。

年史編纂室に出入りしてゐるうちに、同室の熊博毅次長から「クローデルと関大人脈について」執筆を依頼された。断片的とはいへ、すでに個別に年史に記載されておゐり、今さら屋上屋を重ねることを憚られたが、一部、

新しい発見もあつたので、広くヨーロッパという別角度から関西大学を見ることも、歴史的意義があるように思へた。こうしてフランス文学にはあまりかわりのない筆者ではあるが、乗りかかつた船ということで、執筆を引き受けることにした。ただ本稿には、多数の登場人物がおり、多少錯綜してゐるので、蛇足ながらクローデルと関大ゆかりの人びと、おもに宮島綱男と服部嘉香の歴史的時系列を示しておこう。

2 クローデルと姉カミーユ

ポール・クローデルは一八六八年に、フランスの北部エーヌ県のヴィルヌーヴ・シュル・フェールの寒村に官吏の末っ子として生まれた。彫刻家を目指す姉の強い希望によって、家族は父親を田舎に残し、一八八一年にパリに移住した。少年クローデルはパリのサン・ルイ高等学校に通ったが、友人として後に『魅せられたる魂』で世界的に有名になるロマン・ロランがおり、かれと机を並べて勉強したり、音楽会へ通ったりした。パリで文学に関心を示したクローデルは、ランボーの影響を受け、マラルメの詩会「火曜会」に参加する。さらに文学者ジツドとの交流もエピソードとして知られているが、かれは外国へのあこがれを実現するために、外交官になろうと考える。

クローデルはパリ大学をへて、一八九〇年に外交官試験に首席で合格し、希望どおり外交官の道を歩む。その間、一八九三年のアメリカ副領事を皮切りに、清国、イタリア、ブラジル、デンマーク、ベルギー、オーストリ

ア・ハンガリー、日本、アメリカの領事、大使などを歴任した。しかし同時に、寸暇を惜しんで作家としての詩作や戯曲の創作活動もおこなっている。比較的知られたものとして、『黄金の頭』、『女と影』、『マリアへのお告げ』、『火刑台上のジャンヌ・ダルク』などの作品がある。

外国、とくに日本への関心は、彫刻家の姉カミーユ（一八四一—一九四三）の影響であるといわれている。彼女は才気溢れ、評判の美人であったが、早くから彫刻家を目指し、その世界へのめり込んでいった。やがて彫刻家での大成を夢見、十八歳の芸術家の卵は、あの「考える人」で有名なロダン（一八四〇—一九一七）に弟子入りをした。

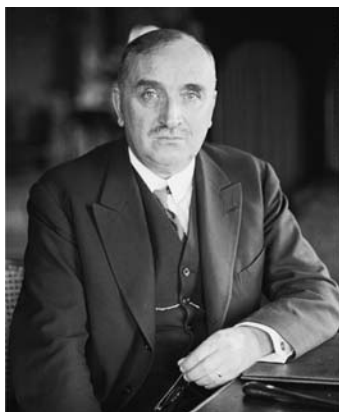
しかし彼女は、師弟の関係を越え、恋愛関係からさらに、ロダンの愛人になってしまう。たしかにそれは、両者に芸術的な靈感と創造的エネルギーを与えたのは事実である。ところがロダンはカミーユとの関係をもちながら、それに誠実に応えようとせず、もう一人の別居中の内妻ローズとも縁を切ることはなかった。その意味ではかれは、優柔不断であり、不実の男性という謗りを免れ

ない。カミーユの懊悩は烈しく、エキセントリックな性格もわざわざいして、それは彼女の心に深い傷跡を残した。

さて二十五歳のカミーユは、ロダンとの三角関係に憔悴し、新境地を求めようとしたのか、音楽家クロード・ドビッシーと一時的に恋に落ちる。かれとともに、一八八九年のパリ万国博覧会を訪れるが、このドビッシーを通じて彼女は葛飾北斎の富岳三十六景「神奈川沖浪裏」を知った。ドビッシー自身もその版画に靈感を受け、後に交響曲『海』を作曲したという説がある（事実、そのジャケットに北斎の絵を載せている）。

カミーユもまた、北斎の版画やジャポニスムに強く惹かれていった。彼女は日本熱を外交官となる弟に吹き込んだので、クロードは日本への憧れを膨らませることになった。その意味では、カミーユはクロードと日本を結びつけるきっかけをつくったといえよう。後に彼女は、弟と日本行きを計画したこともあったが、事情で断念した。

カミーユはロダンとの愛の軋轢、ロダンの子の妊娠中絶、芸術的葛藤、女流芸術家に対する世間の無理解、こ



外交官時代のクロードル



若き日の姉カミーユ

のような諸条件が重なり、とうとう精神に異常をきたしてしまった。こうして彼女は一九一三年以降、創作を放棄して精神病院で三〇年間、ロダンを呪い、世間を呪って暮らさねばならなくなった。

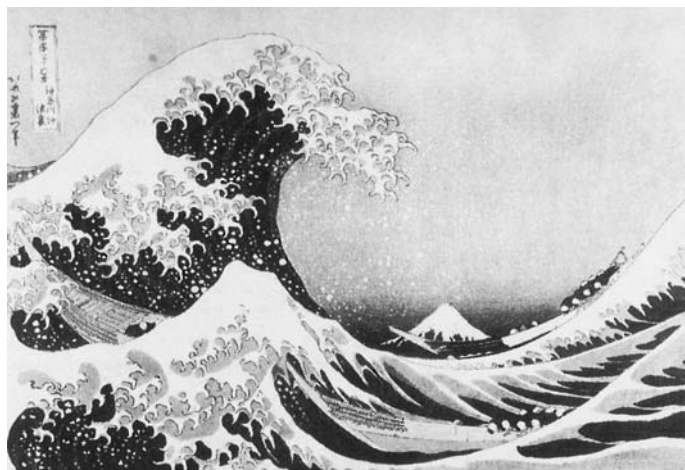
この姉を題材にした、ブリュノ・ニュイッテン監督の『カミーユ・クロードル』という映画が日本でも一九八八年に上映され、彼女の彫刻やロダンとの関係が注目を浴びた。姉は結局、一九四三年に精神病院で孤独に死んでいくのであるが、弟クロードルにとっては人生の多くを外国で過ごしたとはいえ、その間、姉カミーユの行状が心痛の種であった。

さて、彼女の彫刻やその他の作品は、散逸、破壊され、現存するのは九十点ぐらいであるが、近年、評価が高まり、愛好者が増えている。とくに『波』（一八九八）は、先述の北斎の富岳三十六景「神奈川沖浪裏」に強く影響を受けていることがわかる。次ページの図に示すように三人の踊る女性、ニンフという解釈があるが、筆者はもっと具体的にヨーロッパ古代ギリシャ伝統の美と優雅の女神カリス（複数はカリテス）をイメージしていると

思う。ここにヨーロッパ精神とジャポニスムを融合させ、美を追求する彼女の世界が展開されている。しかし、大波がそれに今しも襲い掛かって呑み込んでしまいそうので、破壊を予感させる動的な緊張感が強く伝わってくる。

この作品をロダンとのかかわりにおいて再検討すると、カミーユの心境が痛々しくリアリティを増す。クロードルは晩年の一九五一年六月に、姉カミーユについて、「彼女はロダンにすべてを賭け、彼とともにすべてを失った。美しい船は、しばしにがい谷間に翻弄されたあと、船体、積荷もろとも沈没してしまったのだ」（『眼は聴く』山崎庸一郎訳）と追悼している。

詩人リルケ（一八七五—一九二六）もロダンの彫刻に魅せられたひとり、一九〇二年にパリに来了。詩人はパリという街やロダンを通じて「見ることを学び、有名な『マルテの手記』や『若き詩人への手紙』、『ロダン論』を書いている。またロダンもリルケの住居を訪れ、気に入った部屋をアトリエとして使用させてもらっている。リルケはパリに滞在してまもなく、すなわち一九〇二年からロダンの秘書となるが、後の一九〇六年以降、



葛飾北斎作・富岳三十六景「神奈川沖浪裏」とカミーユ・クロードル作「波」

疑い深いロダンの誤解から両者は離反した。

さらにパリ時代のリルケはカミーユとも知り合い、ポール・クロードルの友人ヴァレリーとも親しくなった。その親密さは、リルケがかれの作品をドイツ語訳して出版していることから裏づけられる。リルケはパリでの交流関係をさらに広げ、ロマン・ロラン、一時パリに滞在した作家のシュテファン・ツヴァイクとも面識をもち、親交を深めた。ここから後に、クーデンホーフが「パン・ヨーロッパ運動」を提唱したときに、先述の賛同者リストにクロードル、ヴァレリー、リルケ、シュテファン・ツヴァイクが名を連ねているのも、すでにパリでのこのような人脈の下地ができていたからといえよう。

3 クロードルと日本

クロードルと日本との関係は、かれが旅行者として一八九八年五月から一ヶ月弱、日本の長崎、京都、東京、日光などに滞在したことから始まる。本格的にはフランス大使として東京に赴任してからであるが、クロードルの日本滞在は、一九二一年十一月十七日から一九二七年

二月十七日（途中、一年強、帰国）までであった。

歴史的に見れば、外交官クロードルの役割は、日本とドイツの接近に楔を打ち込み、日本における親仏路線の確立にあったと考えられる。しかし現実には、まだヒトラーは政権を取っておらず、一九二〇年代の日本は激動の昭和史の前夜であったとはいえ、幸か不幸かクロードルの東京滞在中には、あまり大きな政治的摩擦がなかった。そのため外交官というよりは、文化人クロードルの活躍が日本で可能であったものと考ええる。

当時の状況を知る文献としては、クロードルの外交書簡集『孤独な帝国 日本の一九二〇年代』（奈良道子訳、草思社 一九九九年）があり、また最近では、『日本におけるポール・クロードル』（中條忍監修、クレス出版、二〇一〇年）が出版され、日記、外交書簡、知人書簡、メモが時系列に収録されている。これを読めば、一九二一年十二月から二二年二月にかけてのワシントン軍縮会議での日本の動向や、日本が一九二三年、八月十七日に日英同盟を解消し、外交的に孤立を深める様子、日本の政治家の動き、皇族との関係、世相などが手に取るようにわかる。

たとえば一九二二年に、雑誌『改造』で知られる改造社が、アインシュタインを日本に招聘し、夫妻は四十三日間滞在したが、クロードルは日本でのアインシュタインの異常な人気を克明に本国へ伝えている。とくに、この来日途中の船上で、アインシュタインは自分のノーベル賞受賞のニュースを聞いたという、ドラマティックな出来事もあり、日本での人気はいやがうえにも盛り上がった。クロードルは外交書簡に、「アインシュタイン教授の来日がドイツの科学の威信を高めたことは確かです。このことから……教授と同格のフランス人が来日することとがフランスにとって必要であろう」と結んでいる。

さらにクロードルは、ムッソリーニのファシスト党が日本に対する宣伝をしていることに敏感に反応した。つまり、一九二六年六月十五日の外交書簡では、ムッソリーニが日本の青年にメッセージを送ったこと、さらに日本のイタリア大使館の書記官が、例の「黒シャツ」（イタリア・ファシストのトレードマーク）を着て演説をおこなった内容をこう引用している。書記官は「モスクワの道、すなわち民衆を扇動する独裁主義共産党の道か、さ

もなくば、ローマの道すなわち国民に優しいイタリア・ファシストの道」しかないとし、後者の選択を迫った。ところが結果的に、日本は親仏的な路線を歩まず、ナチス・ドイツ、イタリアのムッソリーニとの繋がりを次第に深め、後のことであるが、日独伊三国同盟（一九四〇）へと突き進んでいくのである。

政治的動向以外では、日本に赴任中、かれみずからも関東大震災（一九二三年）に被災しながらも、東京に救護施設を建設し、日本人の救援活動に尽力したこともわかる。また姉の影響もあって、クロードルはジャポニスムに深い関心を示し、『目は聴く』や『朝日の中の黒い鳥』という日本文化論のエッセイも多く書き残している。これが邦訳出版され、後者は堀辰雄が『大和路・信濃路』のなかでそのことを紹介した。

クロードルは職務のかたわら、日本でも能や文楽の舞台見物に出かけ、親日家ぶりを発揮した。一九二三年（大正十二年）正月に歌舞伎鑑賞の際、芥川龍之介と出くわしているが、もつとも気づいたのは芥川で、その光景がかれの日記に「まるまると肥った仏蘭西の大使クロード

ル氏を始め、男女の西洋人も五、六人、オペラ・グラスなどを動かしている」と記されている（渡邊守章「クロードと能」、『外国人の能楽研究』所収、法政大学能楽研究所編参照）。

なお、建築家である安藤忠雄氏は、日本経済新聞の「私の履歴書」の欄（二〇一一年三月三十一日朝刊）で、東日本大震災と原発事故に遭遇した日本をダブらせ、一九四三年にクロードが親友のヴァレリーに日本の将来を案じて語った言葉を引いてこう述べている。

フランスの詩人ポール・クロードは同じく詩人で友人のポール・ヴァレリーに「私はこの民族だけは滅びてほしくないと願う民族がある。それは日本民族だ」と話したという。その日本は存亡の危機にある。今こそ第三の奇跡を起こすべく、日本は真に変わらなければならない。

第二次世界大戦中、クロードはナチスに占領されたパリで、活動を制限された。その結果、作品『接触と環

境』は発禁になったが、それでもかれはナチスのユダヤ人迫害に抗議をしている。そのような状況のなかでも、クロードは敗色が濃くなっていく日本のことを案じていたのである。いうまでもなくクロードが日本の友人たち、日本文化の伝統、とくに能、歌舞伎、文楽を愛していたからである。

4 関西大学昇格記念のクロードの講演と 文学科開設

関西大学が一九二二年（大正十一年）六月五日付で、文部省より新大学令による大学と認可された（以来、本学では六月五日を「昇格記念日」と称す）が、それを記念して、当時、駐日フランス大使のポール・クロード博士を招いて、同年五月二十七日に千里山への移転もない校舎で講演をおこなった。企画を提起したのは、専務理事をしていた宮島綱男であった。フランス留学経験のある宮島は、フランス人の法学者ボアソナード博士（一八二五―一九一〇、かれの弟子たちが関西大学を創設）と深い縁のある本学にとって、記念すべき祝賀の一環と

してクロードルがふさわしい人物であったと考えたのであろう。大使の側としても、フランスへの理解を深めるいい機会ととらえたのは当然である。記録から見るかぎりクロードルと宮島の接点はここに始まる。

クロードルは、一九二二年五月二十一日に東京から京都に到着し、京都帝国大学での講演や京都見物をへて、五月二十七日に来阪している。「大阪朝日新聞社社長村山竜平の歓迎を受け、日本料理の昼食。車と電車を乗り継ぎ、関西大学に十三時三十分に着。十四時、同大学で『仏蘭西語の習得と効用に就いて』。通訳は宮島綱男」（関大の講演記録では「佛蘭西語について」と表記）とある。

講演の翻訳そのものが残っているが、その主旨はこうである。言語は歴史や文化を凝縮したものであり、フランス語が国際理解や正義、思想の表現に最もふさわしい。たしかに日本ではまだフランス語はあまり普及していないけれども、現代のフランスはヨーロッパのみならず世界においても重要な位置を占めているのは、ご承知のとおりである。今後の国際化していく世界では、国家は孤立して存続はできないのであるから、そのためにフラン



「学の実化」講座で講演するポール・クロードル

ス語を習得しなければ、相互理解のために世界を舞台に活躍することが不可能である、とこのようにクローデルは学生に説いている。

しかしクローデルと本学とのかわりは、この講演だけではない。関西大学文学部のホームページの「歴史と沿革」では、文学部の前身が次のようにしるされている。

一九二四（大正十三）年に関西大学文学部の前身である専門部文学科が開設されました。文学科の開設にあたっては、当時の駐日フランス大使ポール・クローデルの勧めによるところが大きいと伝えられています。詩人としても高名であった彼は、本学の開設した「学の実化」講座に講師として来学した折り、大学首脳陣に文学部の設置を熱心に勧め、これを機に文学科が開設されました。

この意味において、クローデルは文学部開設の祖ともいふべき役割を果たしたともいえよう。たしかにクローデルの来学以前にも、文学科開設の動きはあったという記

述もあるが、クローデルの強力な後押しで、話が進展し、実現したというのが真相ではないか。今日の文学部の充実・発展にかんがみて、このエピソードはたいへん感慨深いものである。

クローデルは外交書簡の一九二二年六月二日付（『孤独な帝国 日本の一九二〇年代』）で、フランス本国外務大臣へ関西大学の「文学部」開設を次のように書き送っている。

京都旅行が終了したあとで、大阪まで足を延ばしました。私立の関西大学からも学生の前で講演をするよう依頼されていたのです。この大学は、三十六年前にボアソナードの弟子たちの手で創立されましたが、最近、地元の裕福な実業家であり農商務大臣の友人でもある人が、気前よく援助したことで大幅に拡充されました。ボアソナードはフランス人教師で、日本の主たる法典はこの人物のおかげで起草できたのです。この大学はわが国に対し一貫して友好的でした。今日までは、法学・政治経済学・商学しか教

えていませんでしたが、まもなく文学部が開設されるのでフランス人教師を招きたいとの意思表示がありました（最近同じ大阪に開設された外国語学校でも同様の話がありました）。学生数は三千人です。大阪市は伝統的なものに好奇心と愛着をもつ一方で、今日の日本経済の中心地であるだけに、この文学部開設は興味深いものです（大阪は旧体制の徳川時代には日本における文学の中心地でした）。

関大における講演後、クロードルの行動がさらに記録されている。「夕刻、文楽座で豊竹古鞠太夫の浄瑠璃、新左衛門の三味線で『彦山権現誓助剣』の瓢箪棚の段を鑑賞。人形の動きと義太夫の語りに関心を寄せる。古鞠太夫はクロードルに浄瑠璃のレコードを贈呈。その後、仏蘭西会主催の晩餐会に臨み、解散後、大阪市街を宮島綱男と小泉幸治の案内で散策、とくに、道頓堀の夜景に関心を寄せる」（『日本におけるポール・クロードル』）と記録されている。なお小泉幸治は、大正十年教授、後に専門部文学科教授になった人物である。

クロードルの講演を皮切りに、「学の実化」の講演シリーズが企画された。このシリーズでは、犬養毅（後の首相、五・一五事件で暗殺される）が一九二三年四月十九日に来学し、揮毫の色紙を残している。山田耕筈（音楽家、本学の学歌を作曲、当時は筈でなく、作と称していた）、関一（大阪市長、御堂筋などの都市計画で知られる）などの今日でも名を残す人びとだけでなく、神戸駐在ドイツ公使、駐日スイス公使、駐日ベルギー大使など、外国人の講演を企画している点に特徴がある。

国際派宮島の外部人脈の多彩さと、それをテコに使った「学の実化」の主張がここにも見受けられる。なお、一九二四年にかれは、関西大学学生の各種研究会をも発足させており、「フランス研究会」はポール・クロードルを名誉会長にした。宮島が名前だけ借用したのだろうが、実際は賀来俊一が会長であり、宮島本人は「ドイツ文化研究会」の顧問におさまっている。

5 宮島綱男と関西大学

本学でも宮島綱男（一八八四―一九六五）を知る人が

少なくなつたが、その評伝は日本史の横田健一名誉教授が『関西大学百年史 人物編』に書いている。私事になるが、筆者が池田市にある自動車会社ダイハツの研究所に勤務しながら、天六にあつた本学二部文学部へ入学したときに、横田健一名誉教授は当時、文学部長であつた。宮島はその一年後に死去しているので、私などはまったく出る幕ではない。日本史の大家横田名誉教授は宮島本人に直接インタビューし、聞きただすという実証的な評伝を書いているので、それに依拠しながら、さらに筆者が収集した関連資料を加えて以下にまとめておきたい。

宮島は愛知県犬山市出身で、一八八四年（明治十七年）に生まれたが、実家は素封家であり、かつ父親は地方政治にかかわっていた。上京し、早稲田大学商科を卒業した。大学ではかれの名前を知らぬものがないほどの秀才であつた。在外研究員としてヨーロッパ（イギリス、フランス、ベルギー）へ留学し、帰国後、一九一三年に教授に任じられた。生え拔きの宮島は、将来を嘱望されたエリート中のエリートであつた。宮島ら少壮教授たちは、恩賜館という三階建てに研究室をあてがわれていた。

これを「恩賜館組」といい、母校改革にも積極的に取り組み、かれら自身ではそれを「プロテスタンツ運動」と呼んでいた。思想的には吉野作造の民本主義に影響を受けていたといえる。

宮島が早稲田の教授として教壇に立つておよそ四年後に、世にいう「早稲田騒動」が起こる。発端は一九一四年に大隈重信が内閣総理大臣に任命され、しばらくして文部大臣に時の早稲田大学学長の高田早苗を抜擢したことにある。しかし、一九一六年に大隈内閣は総辞職し、同じく大臣であつた高田も辞任した。その高田を再度、学長にしようとする一派と、大臣を辞めてすぐ安易に学長に横滑りをするを是としない教授たちが対立した。後者は当時の学長の天野為之の続投を主張し、この抗争が学生を巻き込んで騒動に発展してしまつたのである。

このように「早稲田騒動」は学長選出をめぐる抗争とされているが、当事者のひとりである服部嘉香（一八八六一一九七五、後に本学教授、後述）の『早稲田の半世紀』によると、本質的にはそうではなく、大学改革派若手教員の「プロテスタンツ運動」が、学長選出とリンク

し、さらに学生自身の革新運動が絡んで思わぬ方向に進展したというのが実情のようである。結果的に、混乱を「主導した教授たち」のうち、永井柳太郎、井上欣治、伊藤重次郎、宮島綱男、原口竹二郎が罷免され、それに抗議するプロテスタント運動派の大山郁夫（後述）、村岡典嗣（後に東北帝国大学教授）、服部嘉香も辞任し、大学を去っていった。

当時、政治学科の学生、尾崎士郎は宮島と同じ愛知県出身であった。ただし、宮島は三十を越えた教授、尾崎は十九歳の学生であり、両者は運動では目立った行動を取ったといえ、交流があったかどうか定かではない。積極的に学生として活動した尾崎は、「戦いに敗れ」大学を去り、二度と早稲田には戻ってこなかった。その後、尾崎のベストセラー『人生劇場』のなかで、かれは「早稲田騒動」について書いているが、それを精緻に分析すれば、モデルとなった人びとを推測できるのかもしれない。

いずれにせよこの「騒動」によって、将来を嘱望され、もっともすぐれた人物たちが早稲田を去ったと、世にいわれている。関西大学はこれらに関与した人びとのうち、



宮島綱男

宮島を専務理事・教授に、しばらくして服部を講師、後に教授として任用することになる。また早稲田を辞任した大山郁夫も、戦後、関大の講演会に呼ばれているので、関西大学と「早稲田騒動」は、深い因縁があったといえよう。

早稲田を辞めた宮島は、大阪商業会議所会頭山岡順太郎（後に関大総理事、学長）の秘書となり、やがて山岡が関大の経営に参画するようになると、宮島は一九二一年に教授に任用され、翌二十二年に経営の中枢を担う専

務理事に就任した。

宮島が大学昇格時に、千里山移転で資金集めにどれだけ苦労したか、エピソードが残っている。総理事山岡の紹介状をもって、宮島が関西の財界のトップへ寄付金集めに回ったとき、鐘紡社長武藤山治に「金をもらいに来たのならば、お前は乞食か」と文句を付けられた。直情型の宮島にしてみれば、目的の大義のために、はらわたが煮えくり返る思いを耐え、「私は自分のために寄付を頼みに来たものではありません。大学のために金をもらいに来たのです。金をもらうのが乞食ならば、おっしゃるとおり、私は乞食です」と答えた。後日、武藤は宮島の応対を意気に感じ、当時三千元（現在では十万円）の巨額の寄付をしてくれたという（『関西大学百年史』参照）。

ところが宮島専務理事の時代は長く続かなかった。関西大学でも、宮島はまたもや排斥運動にみまわれる。あの「早稲田騒動」再来ともいうべきかもしれない。その原因は宮島の自分の意見を曲げぬ、独断専行型人間であったことによる。これが関大の歴史のなかでも有名な「宮島追放事件」である。『関西大学百年史』の「人物編」に

も詳細にいきさつが述べられており、資料が残っているで、ここでは深く立ち入ることはしない。ただし、以下の展開のためにその原因を必要最小限度のみ、年史編纂室にある記録にもとづいて要約しておこう。

- 1 千里山学舎と福島学舎の教育条件の格差による学生のスライキ
- 2 文部省による大学教育行政への圧力
- 3 宮島専務理事の「独断専行的」な理想主義を目指す大学経営
- 4 山岡学長と宮島専務理事の不和（横田名誉教授の聞き取りでは「山岡がその子息を専務理事にしようとして、宮島の反対を受けた」（『関西大学百年史 人物編』）との説。
- 5 不明朗会計への責任
- 6 校友を背景とする学生の関大ナシヨナリズムと「早稲田大学出身者」との確執
- 7 大正デモクラシーの世相

このような諸要素が複合的にからんで、事件が発生したことがわかる。いずれにせよ宮島は、一九二七年十一月三十日に専務理事と教授職を辞任し、関大を去っていた。またもや野に下った宮島の人物像を、横田名誉教授はその評伝のなかで次のように書いている。

剃刀のように鋭く切れる頭脳は、おそろしく回転がはやい。鋭い眼は直ちに人の心の裏の裏まで読んでしまう。……自説は強硬に主張、実行してソツがなく、有能であり、反対することは容易ではない。叱責は実にきびしく、はげしい。非常に博学で、ヨーロッパ文化、とくにフランスに関しては百般のことに通曉し、また恐ろしく自信タツプリである。外国語が巧みで、とくにフランス語、英語は堂々と流暢に話し、書く方も実にうまい。一流の外国人との交際も多く、日本の伝統文化にも造詣が深く、特に文楽に関しては、仏文の著書もあるくらい詳しい。自分の関心のある部門では、物すごいほど負けず嫌いで、猛烈に勉強してでも勝とうとする。したがって

敵にまわせば怖ろしい。もし有能な人物で、従順にその下についていれば、非常にかわいがり、引き立ててくれるが、肩をならべるとか、従順でなくなれば破門されたり、ズバリと切られたり、烈しく叱られ、遠ざけられることになる。

関大を去った宮島のその後の足取りを簡単にたどっておこう。かれは一九二八年に国際労働会議（第一次世界大戦後設立された国際連盟の姉妹機関、通称ILO、日本は一九三八年に脱退）の使用者代表委員に任命された。かれはスイスのジュネーヴ（当時ゼネヴァと表記）で開催される第十一回の国際労働代表会議顧問随員として渡欧した（大阪毎日新聞一九二八年四月一日記事）。

さらに大阪毎日新聞の資料では、宮島はジュネーヴで開催された第十六回のILO総会（一九三四年）の政府派遣の資本家側代表顧問として派遣される旨、閣議決定されている。この時の同じ派遣団の労働者側の代表として、西尾末広（後の民社党委員長）の名前も見える。西尾はすでに一九二四年に、日本が初めてILOに代表を

派遣したとき、労働者代表の随員として渡欧しているから、宮島と出合ったときには二回目であった。

西尾の評伝では一九二四年の船上での使用者と労働者側との和やかなやり取りが書かれており（江上照彦『西尾末廣伝』、片道四十有余日、宮島と西尾が出合った一九三四年でも、日本人同士の船上での交流は同様であったろう。帰国後の宮島の足跡は、神戸日仏協会（一九〇〇年設立）会長などを歴任したとある。

横田名誉教授の評伝では、宮島のヨーロッパでの足跡は、概括的なもので、「旧師シャルル・ジッド」（作家ジッドの叔父にあたる経済学者）のもとで研鑽し、フランス、スイスに駐在したという記録しか筆者の手元にはない。ただし、神戸商大（現神戸大学）の記録によると、一九三一年に来日していたシュンペーター（一八八三—一九五〇、ウィーン大学出身の経済学者、後にハーバード大学教授）が来阪したとき、二月十二日に、宮島の教え子である森川太郎（後、学長）がNHK放送局に出演し、かれの英語通訳をした。その夜、宮島は森川ともどもシュンペーターを文楽に案内したという記録が残って

いる（『神戸商大新聞』）ので、この時点では日本にいたか、一時帰国していたかと考えられる。

6 フランス文学者河盛好蔵と関西大学

宮島とかかわった人物にフランス文学者河盛好蔵（一九〇二—二〇〇〇）がいる。かれは旧制三高、旧京都帝国大の仏文科の卒業生で、関大への就職の際に当時、専務理事をしていた宮島の面接を受けている。後のフランス文学界の大御所となり、大佛次郎賞、文化功労賞、文化勲章を受賞する人物である。晩年、日本経済新聞の「私の履歴書」のなかで、河盛は一九二六年の卒業に当たり関西近辺の大学を回ったが、どこにも就職口がなく、ようやく関西大学に就職したいきさつをこう書いている。

ただ関西大学だけが、千里山に新しい予科の校舎を作って、そこで第二外国語にフランス語を課する計画があり、漸く就職口を見つけることができた。それは専務理事の宮島綱男氏が大のフランス好きであったからである。そのとき宮島さんが「しかし俸給

は安いよ。大学に残って助手になっても、一カ月二、三、四、五、六十円ぐらいしかもらえないだろう」と云われたのをよく覚えている。二十円と六十円ではずいぶん違うのではないかと、心のなかで思い乍ら聞いていたが、結局、五十円の月給を頂くことにきまった（一九九一年三月二十三日朝刊）。

当時の大卒の初任給が四十五円ぐらいであったので、そこそこの金額であるが、河盛は京大の落合太郎講師に事情を報告した。落合は安すぎるといって、宮島と直接交渉をしてくれ、六十円にしたらったという。ここにも大学経営において、当時、専務理事に一切の決定権があったことがわかる。なお河盛はそのかわり、フランス語だけでなく英語や文学概論まで、多くのコマ数をもたされた苦勞話を回想している。

さらに河盛は宮島のことふれ、「Mさんはフランス語に堪能で、とりわけ公の席でフランス語の演説をするのが大好きであった。そのためにフランスから名士が来日すると、すぐ伝手を求めて、大学に招待し、講堂に迎え

て、歓迎の辞を述べるのを道楽にしていた。それは大いに結構であったが、そのとき招かれた名士は必ず挨拶をしたり、講演をしたりする。するとその通訳はいつも私のほうにまわってくるので、これには全く閉口した」（『私の茶話』）と回想している。

河盛は、宮島追放騒動によって宮島が一九二七年の十一月末に辞めた後、同様に翌年三月に関大を辞任している。騒動に嫌気がさしたのは事実であるが、心情的に宮島と行動を共にしようとしたのではなく、本場フランスへの留学に強い憧れをもっていたからであろう。同年春、河盛は私費留学生として、四月二十六日に神戸港からフランスのパリへ向けて乗船した。途中、下関、上海、蘇州、香港、シンガポール、ペナン、コロンボ、アデン、スエズ、カイロ、ポートサイド、ナポリを経て、マルセイユに六月六日、翌々日八日にパリに到着している。（およそ二十数年前に青山光子やクーデンホーフが渡欧したり、ILOに派遣された政府代表が乗船したりしたのと同じ航路である）。

現代でもそうであるが、パリは多くの文人のあこがれ

の地であり、人を惹きつける魅惑の都市であった。一九二〇年代後半から三十年代前半のヨーロッパは、激動の時代であったが、河盛は私淑していた島崎藤村の足跡をたどり、話題作『藤村のパリ』を書く。河盛と相前後して倉田百三、片山敏彦、金子光晴などがパリに滞在していたが、かれらと宮島の関係を示す記録は、筆者の手元にはない。

ところが宮島と河盛は、第二次世界大戦後、「ロマン・ラン友の会」で奇しくも名前を連ねることになる。さらに晩年になって七十三歳の河盛は、一九七五年十月十九日に関西大学で日本フランス語フランス文学会が開かれた際、大学を訪れている。当日、長老として懇親会で挨拶をおこない、自分の教師としての第一歩が関大であったことを披瀝した。若き日のシーンを回想してエッセイにも、関大の「二年間の生活が実になつかしく想い出される」（『私の茶話』）と述べている。教師生活のスタートを切った本学に、河盛は何かのシンパシーを感じていたのであろうか。

7 宮島の盟友・服部嘉香と学歌制定

宮島と同時に早稲田大学の講師を辞した服部嘉香は、文学的環境に恵まれた歌人であった。経済学者の宮島と違って、文学者であり創作にも手を染めた服部であるだけに、手がかりになる資料を多く残している。父がもともと役人で、工部省に勤めていた関係のため東京生まれであるが、家系は四国松山の旧伊予藩の藩士で正岡子規の遠縁にも当たる。正確には父服部嘉陳は子規の母方の兄で、嘉陳は一八九二年（明治二十六年）六月二十三日に、子規へ結核見舞い状を送っている。

また若き服部嘉香が子規と女性との関係について書いたとき、子規の妹である律に叱られたことを披瀝しているが、彼女は司馬遼太郎の『坂の上の雲』にも登場すること、世によく知られている。なお服部は、律が二度結婚したけれども、いずれも離婚したのは子規の看病に専念したからであると述べている（『子規の母と妹』『子規全集』第十一卷「月報」参照）。

服部は四歳のときに松山に帰り、夏目漱石の『坊ちゃん』

ん』で知られた松山中学を卒業後、早稲田大学の予科を経て、大学部英文科に入学した。その間、坪内逍遙、島村抱月の講義を聞いている。かれの同級生には、若山牧水、北原白秋、三木露風、土岐善麿ら、歌人として大成した錚々たる人物がいた。

服部は一九一三年（大正二年）に早稲田大学講師となり、英語、作文、文学概論を教えるようになった。やがて一九一七年（大正六年）に先述の「早稲田騒動」にかかわっていく。その経緯はすでに述べたが、服部は自分の立場から、『早稲田の半世紀』のなかで、一九一七年九月四日の改革派の五教授罷免に対して、どのような行動をしたのかを次のように回想している。

吾々は即夜会合し、即夜辞表を提出した。他の四教授は知らず、同志宮島に罪あらば残る三人も同罪である、三人に罪なしとするならば宮島の罷免は誤である。「下名等はこの処置を以って不公平、不合理、不信の挙と認め、当局に対して不信任の意志を表白せざるを得ず。」として、大山、村岡、服部が一紙に



1925年に服部宅で撮影した写真（左から前田夕暮、三木露風、北原白秋、服部）

連署名したのであった。……

九月十日、大山君は塩沢先生に、村岡、服部は金子先生に呼ばれて、それ〴〵涙声共に下る留任勧告を受けたが、吾々は涙を吞んで拒絶した。十月に入り、わたくしには、最近物故された煙山専太郎先生が私宅に来訪されて懇切に帰任を勧告されたが、これも拒絶した。……大山、村岡、宮島三君と徹宵話し会った戸山町の私宅も戦災で亡失した。すべては過ぎ去った夢である。

武士の家系の出であるからか、明治維新の歴史を経て



服部嘉香

いるせいなのか、歌人でありながら明治生まれの気骨が伝わってくる。早稲田を辞めてから、服部は大阪の新聞社で勤務したが、まもなく、先述のように関西大学に奉職した。そのきっかけについて、服部自身が『関大一二五号』（一九六五年八月十五日）で、一九二一年（大正十年）十月に本学へ来任したことについて、次のように書いている。

その頃、関西大学は大学令による大学設立の認可を文部省に申請する直前で、山岡順太郎氏を大学拡張後援会長として準備を進めており、中橋徳五郎氏が文部大臣であつたので、両氏の関係から間違いなく認可のあることが予想されていた。宮島君はそれについて枢機に参画していて、明年を期して新しい大学教育確立のために、機構の改正、施設の拡大、授業内容の改革を行い、大阪以西の秀才は全部関西大学に吸収して大学の面目を一新したいのだ。協力してくれないかというその意気に私は動かされた。協力力といっても、応接のいとまのない創意ある企画、

斬新な着想、間・髪を入れぬ実行力は宮島君独自のものであるし、ただ命・これ従うのみであるが、宮島君を助ける意味で同意したのである。

……新校舎は千里山。そこに新生関西大学は正に大阪以西の秀才を吸引することとなった。そこには希望と光明とがあった。活気と歓喜とがあった。日々に澁刺の歩議を進め、燦たる理想を真理の討究と学問の実際化と人格の陶冶に求めた。

大学は日を追うて社会的声望を高め、学生は全生活力的に大学と本質的に結び合い、教職員は新しい教育の場の革新と充実に努力した。

わたくし自身、新生ないし新興ということが、こんなにも大きな力となるのかと驚きながら、酔いながら、青春の精励を捧げて惜しまなかったのである。

その後に学歌を作詞することになる服部は、若き日の心情を学歌のキーワードをちりばめながら、綴っている。学歌についてはこれまで何度も取り上げられ、近年では、石田健一氏が「学園歌の沿革と現状をみる——その正

しい継承と高揚を願って——」（関西大学年史紀要 十八）のなかに精緻に考察されているので、ここで繰り返して話題にすることもないが、服部の人脈との関係で、新たな事実と思われることもいくつか見つかったので、書き記すことを諒とされたい。まず歌詞については、作詞者の服部が『千里山學報六号』一九二三年（大正十二年）一月一日のなかで、次のように述べている。

学歌は従来のような七五調の「固定形式」や美辞麗句、「優雅流麗」を弄するのではなく、「本學の歴史、使命、學問的權威」を「莊重明快」に作詞すべしという方針で取り組んだという。服部は自作の「非文学的」原歌詞を創作していたと見られ、それは先述の石田氏が引用されており、現在の学歌と比較すると一番は、ほとんど同じで、五節の「燦たる理想」が原詩では「遠き理想を」、関西大学のリフレインがないということくらいが違いである。

しかし二番、三番では服部の原歌詞に対し、かなり変更が加えられ、服部の記述を要約すると、「真理の討究」、「人格の陶冶」を軸に、「学問の実際化」、「自由の訓練」、「自治の發揮」などを盛り込むことも要請されたという。

服部は「学歌は大学の憲法的表彰だから語句の生硬は免れない」として要望を受け入れるが、回想の文章の行間には一部、歌人として変更の「不本意さ」を感じ取れる。そしてその経緯を次のように締めくくっている。

学歌の歌詞に付いては、山岡總理事邸で前後三回宮島専務理事と共に三名協議をいたしました。總理事の懇切な御注意により訂正した部分も少なくありませんので、本来は總理事と私との合作ともいふべく、一層合理的に言へば、總理事、専務理事、私の合作であります。茲に私の良心の命ずる所により一言を加へておきます。

ようやく先に作詞が完成し、作曲は藤井清水に依頼したはずであるが、石田氏の引用によれば、一九二三年九月十一日に開かれた理事会の議事録に山田耕作の名前が登場し、「不可解な点が残る」という。すなわち

學歌選定二関スル件

従来ノ校歌を廢シ左記ヲ本學學歌トシテ新定ス

服部嘉香氏 作

藤井清水氏 曲

但作曲ハ更ニ之ヲ山田耕作氏に依頼ス

藤井清水は服部が懇意にしていた作曲家であり、その経緯は後述するが、服部の推挙で藤井が作曲したことは間違いない。藤井の原曲は石田氏も推測しているように、採用されなかったので幻の曲ということになる。しかし、おそらく山岡と宮島たちはその曲が気に入らず、不採用という決断を下したと推測される。作曲者の藤井清水は、関大の学歌を没にされて、落胆したことが伝わってくる。というのも紹介者服部はそのことを気にし、後にかれに学生歌を依頼する（『千里山學報六号』）といって、かれを宥めているからであるが、これはうやむやになつてしまった。

藤井の原曲は残っていないので、不採用の理由は断定できないが、以下のことが考えられる。すなわち山岡も宮島も、開明派でヨーロッパの外国語や文化を積極的に

取り入れる進取の精神に富んでいた。作詞担当の服部も英文学を専攻し、革新的な正岡子規に親しみ、詩風は叙情的な傾向が強いとはいえ、欧米の学歌の詩にも通じていたので、関大の学歌はあえて口語自由詩によるヨーロッパ的理念を重視した。

ところが作曲を担当した藤井清水はどのような人物であつたのか。かれは呉市出身で、一九一六年に東京音大（現東京芸大）を卒業し、小倉高等女学校などで音楽教師をしたり、大阪市北市民会館に勤務したりをしていた。

先輩の山田耕作の推挙で作曲をはじめ、「セノウ楽譜」から合計二十九楽譜を出版し、後に日本民謡協会の設立にも加わっている。最初は竹久夢二の詩に作曲していたが、後に北原白秋、野口雨情の詩を好んで作曲し、雨情とのコンビで「篠田の藪」、「足柄山」、「良寛さま」が代表作として音楽史に名を残す。ただし曲風は日本民謡調的なものを特徴としていた（坂本麻実子「音楽史から読む竹久夢二」富山大学研究論集No.八、二〇〇五参照）。

こう分析すると、とくに山岡、宮島が求めた新しい学歌のイメージと、藤井の作曲した「日本の伝統的な作風」

が噛み合わなかったことが考えられる。そこで服部は藤井が駄目ならば、ということで友人の洋楽出身の山田耕作（一八八六一一九六五、一九三〇年以降耕作と名乗った）を推挙し、作曲を依頼したのである。服部の友人山田は、関西学院の中等部出身（中退）で、苦学しながら東京音大（現東京芸大）をへて、ドイツへ留学した。かれはベルリン音楽学校作曲科で学び、ヨーロッパ音楽に通じているだけでなく、かつ日本的な『赤とんぼ』、『私たちの花』などの作曲でも知られる。

さて服部からの要請を受けた山田は来校し、歌詞を見せられるが、この状況を服部はこう語っている。

……首脳者の前で山田君は「法学博士が二、三人寄り合つて作つたような歌ですね」とずけずけいう。わたくしは内心慧眼に驚きながら「僕が作つたのですよ」というと、「何、君か」と、いささか呆れ顔であつた。でも第一節は完全にわたくしのものであり、全体として名曲に救われたことはうれしく、早大、明大、関大の三校歌が三大名曲ということになって

いる（『千里山學報六号』）。

たしかに服部が認めているように、洋楽を学んだ山田の曲には、服部も含めて大学首脳も満足したようである。いわば山田は、ヨーロッパ音楽と日本音楽の両刀使いであったが、依頼者が何を望んでいるかをすぐさま理解した。事実、明治大学校歌、同志社大学、関西学院大学の各学歌も山田の作曲である。それ以外、大学だけでなく、高校、中学、小学校にいたるまで、多数の校歌を作曲していることから、かれはどのようなテンポ、メロディ、



本学を訪れた山田耕作

雰囲気が学歌や校歌にふさわしいか、じゅうぶん熟達していたのである。いずれにせよ、服部の人脈によつて本学の学歌が誕生することになる。

山田は作曲や各地での実地の歌唱指導の際に、とくに詩と曲のシンクロを重視している。関大でも山田は一九二三年、二五年の学歌の歌唱指導の折に、二番の「学の実化……」は「実化」（ジッケ）と発音させ、三番の冒頭の「自由の訓練 自治の發揮……」は、服部自身の言葉を借りれば「語句の生硬」のため、後に歌いやすいように、「自由の尊重 自治の訓練」に変更されている（『関西大学百年史 通史編』参照）。いずれにせよ、服部、山田のコンビのおかげで、学歌はおもに入学式、卒業式などの儀式にグリーククラブの先導によつて歌われ、「三大名歌」のひとつとして、荘厳かつ澁刺とした歌風が在学生、校友の心に伝承されているのである。

さて、山田耕作は宮島の企画した「学の実化」の連続講演に、講師として来学している。一九二三年十一月五日の山田の講演において、その当時の学生の胸を打ったのは、先述の東京音大卒業後、ドイツ、アメリカ留学と

どうかれの輝かしい経歴でも、現代ある名声でもなく、山田メロディの原点の吐露ではなかったか。山田は九歳のときに父を亡くし、九歳から十一歳まで印刷職工として働いたという。学生の前で語ったものはそのときのエピソードである（『千里山學報第十五号』）。

殊に工場の時間が済んでから自分の仕残り果すために、組版のケースと豆ラムプを片手にかかゝて、眞暗な工場の中を歩き廻る時など、きつと唯一人の母を思出してはほろほろ涙を流したものである。而も小さい私の音楽はかう云ふ間にあつて尚ほよく私を慰め力づけて呉れた。夜更けて森と静つた工場内で私は胸に抱ゑたラムプの油に心臓の鼓動が傳り、しんに吸はれてかすかに起るリズムを無意味に聞かなかつた。そしてそれに鼻歌を合せて活字を拾ひながら、いつか勞働のつらさや母戀しさの悲しみを忘れてゐる自分を幾度も見出したことがあつた。……音楽は云ふまでもなくそのあらはれが綺麗で甘くて、柔くて、肌觸りがよい。例へば花の如く麗しく華か

である。がほんとにこの麗しい花が咲くためには人の目に見えない所に根と云ふものがあつて、ここに力が養はれてゐることが必要である。即ち根に鬱積し、醗酵した力が發して、以て開いたのがこの麗しい花である。……（第十九回「学の実化」講演摘録）

さて学歌をめぐることは、とくに宮島、服部の関係は良好であつた。両者は学歌だけでなく、経営、教学において関大に大きな貢献をしたが、しかし、宮島の性格はこのような蜜月の時代を長く続けることを許さなかつた。服部自身がそのいきさつを、後年、『関大』（一九六五年十月二十五日）におよそ以下のように回想している。

宮島は一九一三年ごろから、学内外で獅子奮迅の活躍をしていたが、直情径行型人間で、独断専行に陥ることもあり、校友にとっては目にあまり、「とうとう二、三の新聞に、早稲田派の宮島・服部が関大をひっかきまわしている」という記事が出回つた。さらに服部は、宮島との行き違いもあつて袂を分かち、「わたしは二度目の学校騒動の渦中に巻き込まれることを密かに警戒し、機をみ

て関大を去ろうと決意した」と告白している。

服部の教え子山崎敬義（弁護士）にも客観的に語ってもらおう。「かねての憧憬の先生（服部）の英姿に教壇で初めて接し……人を引きつける温かいムードあるお人柄を感じた。……先生は大正十四年（一九二五年）、本学を去られたが、その経緯を知る人は少ない。結局、同窓の盟友宮島先生と相容れなかった結果である。服部先生は文学者であるから経済的感覚が薄く、これに反して宮島先生は経済学者でカミソリのように細心の人である。この性格の相違が両先生をして決別せしめたと見るのが正鵠であろう」（『関大』二三三号、括弧内筆者）と評している。

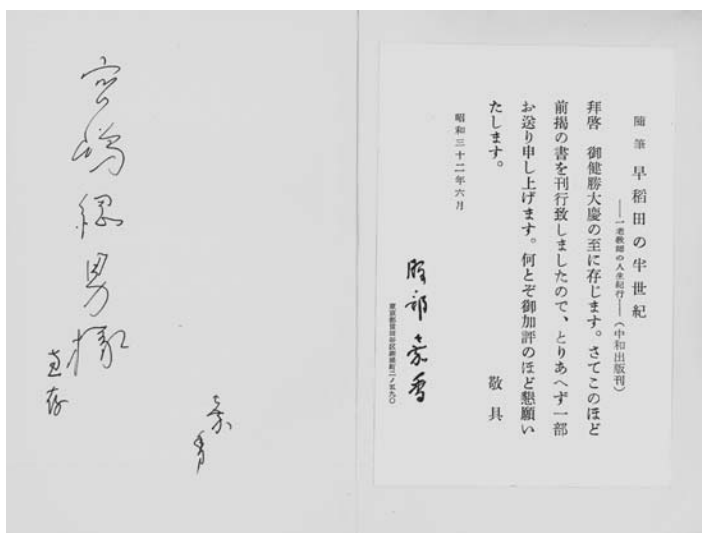
服部は辞職の意思を当時の岩崎卯一（後、学長）にだけ、打ち明けておいた。岩崎はまだ三十代であったが、すでにそれだけ人望があつたのだろう。ひそかに岩崎は、服部に「早稲田に帰るのかと尋ねたので、何の目途もなくとにかく東京に帰るのだと答えた」。そうこうしているうちに、前述したように宮島は山岡総理事と対立し、同時に服部の離反をまねくことになった。宮島が実質的に

「解職」される前に、宮島と袂を分かちながら、服部はまたもやみずから関大を去った。

かれは一九二五年に就職の当てもなく東京に帰り、著述業によつて糊口をしのぎ、後に母校早稲田大学文学部教授へと返り咲いた。服部の晩年、横田名誉教授が宮島排斥運動の件について、聞きただしても服部は黙して語ろうとしなかった。宮島が没して、年月が経っている時期であつたが、服部は武士の情けで、かつての盟友宮島の弱点を口にしたくなかつたのであろう。

この宮島と服部との関係は、たとえば誇張というそしりがあるとはいえ、ヘッセの『ナルチスとゴルトムント』の世界を髣髴とさせる。ナルチスという聡明な知や理性の権化と、ゴルトムントという感性や情の世界に生きる両者の友情は、人間存在の両極を象徴しているが、関大にかかわった先人たちにそれがあてはまるのは、小さな発見であつた。

たまたま筆者が関大図書館で服部の本を探していたとき、かれが早稲田大学の退職の際に、『早稲田半世紀』を出版していたことを知った。その本をかつての盟友宮島



『隨筆 早稲田の半世紀』 宮島にあてた服部の署名

綱男に献本していたらしく、その現物が書庫から見つかった。宮島の所蔵本は、関大図書館の『宮島文庫』に収納されているが、生前、宮島は贈られたこの本を所有していたと考えられる。しかしこれは一般書であるので、当時の図書館員が地下の書庫へ移したのであろう。関大所蔵本に、写真のように服部の自筆のサインが残されていた。服部は関大を去るときには、宮島と反目していたけれども、年月は宮島との和解を促していたことがわかる。

8 服部嘉香と大正ロマンの世界

服部は早稲田時代の若き日に、北原白秋や三木露風と「未来社」を作り、多くの詩を創作した。あの若き宮島でさえ、服部にラブレターの代筆を頼んだぐらいであるから、その詩才には卓越したものがあつたのだらう。服部自身が同人誌の目的を『口語詩小史』のなかで、こう述べている。『未来』は、露風を盟主とし、吾人の精神生活を限定する自然主義から脱出して、平俗の生活にも日々失いつ、ある貴重物を取り返し、吾人の生を無限ならしめんとする藝術活動（……）を起こす目的として

結成された集団の機関紙」であると。これは当時としては革新的な口語自由詩運動と位置づけられる。

白秋や露風、野口雨情だけでなく、山田耕作もベルリンから帰国し、一九一四年に「未来社」の同人になっている。かれらは単に詩作のみならず、現代の「流行歌」ともいうべき分野に進出していった。さらに服部の師である島村抱月は、早稲田実業にいた竹久夢二（岡山生まれ、一八八四—一九三四）の画家としての才能を見抜き、「セノウ楽譜」から出版する楽譜の挿絵の仕事を斡旋した。

レコードがまだ広く普及する前であったので、当時、歌詞と曲は、ふつう楽譜として出版した。代金は大正時代では三十銭程度で、比較的安いものであった。それは表紙の絵とセットで売られたが、イメージを喚起するものとして挿絵画家が加わった。その表紙を描いたのが、抱月に推薦された竹久夢二である。

ところが抱月がスペイン風邪で突然死去（一九一八年）し、舞台女優松井須磨子が後追ひ自殺するという大事件があった。劇中歌として須磨子が歌った「カチューシャの唄」や、後の流行歌「ゴンドラの唄」の作曲は、抱月

の書生をしていた中山晋平であった。この歌を始め、ヒットした楽譜の多くは、夢二の挿絵によって売られた。いわゆる大正ロマンは、抱月の門下生ともいうべき三木露風、北原白秋、野口雨情、山田耕作たちが受け継いでおり、まさしくこれらのグループのなかに、服部、藤井清水、竹久夢二たちがいた。（坂本麻実子「音楽史から読む竹久夢二」『富山大学研究論集』No. 八 二〇〇五参照）

ここで学歌とのかかわりがあった服部、藤井清水のコンビと大正ロマンの世界についてふれておこう。以上の経緯からもわかるように、かれらは服部が関西大学へ赴任して学歌を制作する前から、すでにコンビを組んで「流行歌」を世に出していた。とくに服部、藤井、夢二というトリオで、正確には服部嘉香作詞、藤井清水作曲、竹久夢二画というメンバーで、一九一六年（大正五年）「夢見草」を、一九二〇年（大正九年）には、『雨の泣く日は』を作詞し、竹久夢二のカバー絵の楽譜を「セノウ楽譜」から二種類出している。それ以外に服部は、文部省唱歌となった「牧場の朝」の作曲家船橋栄吉と組んで「二人の恋」を作詞（一九一二年）しているが、原詩は不明

となっている。これは筆者の知る範囲であるが、関大と直接関係がないからか、年史記録にも載っていない事実である。

竹久夢二は、生活のためでもあり、多くのこの種の仕事をし、セノウ楽譜集の挿絵を二百八十枚ほど書いている。とくに服部作詞の「夢見草」の挿絵は、夢二らしい特徴がよくあらわれ、ファンの人気があったのだろう。中古品も売り切れて、現在、入手不可である。ただし再版もされているので、夢二の記念館か愛好家の手にあり、丹念に探せば見つかるはずである。

もうひとつの「雨の泣く日は」は、たまたま中古品で入手可能であることがわかった。さっそく年史編纂室の熊博毅次長に相談すると、次長はすぐさま、関大としては資料的価値が高いので、楽譜の購入を決断された。というのも年史展示室に公開展示をすれば、学生、校友にとっても資するところ大であるからだ。とくにこれは学歌の作詞者の作品であり、挿絵が竹久夢二であるので、話題になるのではないかと思われる。服部の歌詞の内容については、左に引用しておこう。



服部嘉香作詞 藤井清水作曲
竹久夢二画「雨の泣く日は」

服部嘉香作詞 藤井清水作曲
竹久夢二画「夢見草」

雨の泣く日は草の芽の／ 淡き嘆きをそゝるかな
風の泣く日は草の芽の／ あはき憂いを誘ふかな。

雪の重きに下萌えの／ 生くる力はあふれたれ
降る雨みれば嘆かし／ 吹く風きけば氣は怖ぢぬ。

光の國と思へども／ 幸ある國と思へども
人住むことの恐ろしく／ 憂ながらに芽は萌えぬ。

出版元の妹尾幸揚は、「悲しみをもつて唱ふべき歌であります」と解説しており、楽譜は山田耕作が校閲したとある。歌詞はキークワードの新芽、生命力および春、光、希望という情景と、その対極の雨、憂い、嘆き、恐ろしさを対比した、大衆にもわかり易い内容になっている。

いうまでもなくこれは、春雨のなかで新芽が萌えだす生命の息吹と、世のなかの生きる人間の悲しみ、苦しみのコントラストを歌ったものであるが、この詩作の背景を考えているときに、ふと浮かんだのは、服部の遠縁にあたる正岡子規の有名な短歌である。服部は慣れ親しん

だ子規の次の短歌をイメージしていたのではないか。

くれなゐの二尺伸びたる薔薇の芽の

針やはらかに春雨の降る

雨、新芽、春というキークワードが類似しているので、筆者は服部がこれを作詞のイメージに借用したと解釈するのであるが、両者を比較すること自体が不適切であるという批判があるかもしれない。というのも、口語詩を標榜する服部は、わかり易い大正ロマン大衆向けの憂いの世界を描いたけれども、子規の短歌はそのような生易しいものでなかったからである。

たしかに子規は、一見すると春雨のなかですくすくと新芽を伸ばす薔薇を見つめて描写しているので、情景の具体的イメージがすぐ浮かんでくる。しかし、それは表面的な世界にすぎない。短歌の内奥へ一步踏み込むと歌の壮絶さがわかつてくる。病床の子規が春の生命力溢れ、薔薇の芽が伸びる光景をわが身と対比させている。薔薇はやがて赤い花を咲かせるであろう、今はやわらかい棘

であつても、身を突き刺す硬い棘となる。美の象徴の赤

い花は咯血すらも連想させるし、さらに雨は子規の悲しみをあらわす。こう考えると、歌には自分の死の予感を織り込んだ、生命力と死の両極の闘ぎ合いの世界が展開されている。いやむしろ子規の生への闘いという心情を読み取ると、この歌の圧倒的な緊迫感が伝わってくる。

ヒントは子規であれそうでなかりうと、服部は雨が好きであつたようだ。エッセイの「雨に想う」のなかに、次のような繊細な文章がある。

雨に濡れた障子は、夢の覚め際を思わせる。真新しい白い紙に音をたてて来るのは、夢の戸を叩く感じである。よごれた紙にどっしりと浸みて来るのは、深い眠の夢に色がついて、訝り覚める心地だ。ガラス戸に当たる雨滴はなつかしいものである。雨の訪問を明きらかにしてくれる。磨りガラスだと、一層いい。姿の見えない美しい人の来訪を想わせるとでもいおうか、磨りガラスの宿った雨滴は、ちよつとダイヤモンドの感覚だ（『早稲田の半世紀』の「雨に

想う」より）。

服部の得意とする詩の世界は、もちろん雨のみではないが、四季の移り変わりや自然、宇宙を詠んだものが多く、歌人独特の美学が言葉のなかに込められている。ここにあるように、服部の作風が抒情の世界に本領を発揮するのはいうまでもない。ところがそれは学歌の世界とは対極の関係にあり、服部はそのことをじゅうぶん自覚していた。

服部は耕笹が死去したときに、追悼文を『関大』（一九六六年二月十五日）に載せているが、かれはこう語る。『赤とんぼ』『待ちぼうけ』『からたちの花』『この道は』などのすぐれた歌曲は、大正生まれの日本人ならば、幼児、青春、壮年にかけて必ず何度か歌ったであろうし、耳にしたであろうから、日本人のことごとくが、山田氏によつて歌心が養われたことになる。その音楽の親が死んでしまったのである」。もちろんこれは耕笹の一面であり、他方、日本にオーケストラ音楽の新風を吹き込んだことを、服部は忘れていない。

耕作とは異なる意味であるが、服部も単なる「流行歌」だけでなく、深いヨーロッパの素養に裏打ちされたヴェルレーヌやマラルメの詩論も展開するという二面性をもっていた。いずれにせよ服部、耕作の両コンビの学歌は、大正ロマンの土壤にありながら、その対極の世界、当時としては服部のいう「ヨーロッパ文学的」な理想を求め、斬新さと品格を追求したものであった。服部、耕作、さらには山岡、宮島の進取の精神が、学歌に吹き込まれ澆刺とした生命力となって、それが現代に至るまで脈脈と伝えられているのである。

9 宮島綱男の再登板

先述した宮島は戦後、再度本学に復帰した。宮島を再登板させる労を取ったのは、混沌とした戦後の混乱期のなかで、関大の将来を憂えた春原源太郎（後に監事）と阿部甚吉（後に専務理事）であった。かれらはかつての千里山移転の際に見せた宮島の経営的手腕を覚えており、その国際感覚と実行力に期待をかけたのである。いやまともや、時代が関大に宮島を必要としたというべきかも

しれない。こうして宮島は一九四七年五月に理事に入り、翌年一月に理事長に就任した。コンビを組んだ岩崎学長は、大学の再興に情熱を燃やし、「関大ルネッサンス」から「関大アカデミア」を推進し、新制大学切り替えの移行期に腕を振るった。

かつての盟友服部は、戦後、関大を訪ね、岩崎学長に会っている。学長は『とかくの批評はありますが、宮島さんの大学経営の上に示されるオリジナリティーは得がたいものですから、理事長にお願いしました。』とのことであった。宮島君の功績と特性が尊重されたことを喜び、岩崎学長に心から感謝した」（「関大」一二七号昭和四〇年十月）と服部は述べている。

岩崎学長が提唱した「関大ルネッサンス」の一環として、戦後まもなく、片山内閣の文部大臣森戸辰男が招かれ、「新学制化における私学の使命」という題で一九四七年十二月四日に講演がおこなわれた。この手法は千里山移転後の「学の実化」の講演シリーズを彷彿とさせる。同じく関大の講演会に登場したのが、かつての早稲田時代の宮島、服部の盟友大山郁夫であった。

かれは早稲田を辞任（一九一七年）して波乱万丈の人生を送っていた。早稲田を去った後、大山は大阪朝日新聞へ入社（一九一七年）したが、まもなく「白虹事件」（一九一七年の「シベリア出兵」、米騒動にからむ政府による言論弾圧事件）で翌年新聞社を去った。その後、一九二一年に早稲田大学教授に復帰したけれども、「大山事件」（一九二七年、大山の教授職と政党委員長職の兼任を槍玉に挙げられた騒動）によって、またもや職を追われている。類似した宮島との因縁を感じるしだいである。

大山は労働農民党中央執行委員長、新労働委員長をへて、太平洋戦争中はアメリカへ亡命していた。戦後帰国まもなく、右に述べたように関西大学岩崎学長の招きにより、一九四七年十二月五日に天六学舎で講演した。当時の記録では「会場は本学および他大学の学生千二百名であふれんばかりの盛況であった。大山は『学生諸君に与う』と題し、日本は平和の指導国家として国連ユネスコを通じて、世界平和に貢献すべきことを熱烈な主張で語った」（『関西大学百年史』）とある。

宮島は関西大学理事に返り咲いているので、そのとき

にかつての盟友大山と再会しているはずである。穿った見方をすれば、宮島が大山の講演を岩崎学長に提言したのかもしれない。その後、大山は国政界で活躍するが、京都府知事選挙の際に蜷川虎三を、京都市長選に高山義三を擁立したことも知られる。

さて宮島は、一九四八年に理事長就任後、再選の際に、またもや、いや正確には三度目の排斥運動にみまわれる。歴史は繰り返すというが、一九五二年の理事長選挙に先立つ評議委員選挙（評議委員が理事を選出するシステム）に際し、宮島排斥運動が起きた。かれの独断専行に対する周囲の反発である。宮島再登板の立役者春原は、すでに反宮島派になっていた。明石三郎（後に学長）、横田健一、鈴木祥蔵（後に文学部長）らの当時の若手の連携によって、宮島排斥運動がひそかに進んでいた。宮島は選挙の結果、かろうじて理事にとどまったが、最下位票であったので理事長にはなれなかった。理事長になった白川朋吉（弁護士、大阪市会議長）は、八十歳という高齢であったので、実際には校友から推されて登場した四十八歳の久井専務理事（後に理事長）が采配を振ることに

なった。

人情の機微に通じた久井は、自身でこう語っている。「宮島さんは理事に残ったが、理事会ではほとんど発言しなかった。しかし私は月一度位お宅を訪ねて大学運営についてお話を聞きました。客観的な鋭い指摘をされ、いろいろ教えられました……私は宮島さんという人が人間的にも好きになりました。千里山の開拓など宮島さんの功績は大変なものです」(『私学に生きる 久井忠雄と関西大学』と。

同様に続けて、久井は「宮島さんという人は大変シャープな人で、そのシャープさを真綿でくるまずに、キリのように相手を突き刺してゆく。新任の先生にフランス語や英語で問いかけたり……、口頭試問ですよ。ご自分はペラペラですからね。それでうまく答えられないと全部アウトです」(同上書)と述べている。事実、これを実証するエピソードが残っている。

関大フランス文学科の基礎を築いた三木治(後、文学部長)と小方厚彦(後、教養部長)も、宮島の面接を受けたという。旧制三高、旧京都帝大出身で、のちにフラ

ンス語の辞書を編纂する三木治は、すでに戦前の一九三五年に予科講師として任用されていたが、戦争末期の大学縮小のあおりで、一時身を引いていた。当時、第二外国語は同様な扱いであり、筆者も習ったことのあるドイツ語の上道直夫(後、文学部長)の経歴も同様であった。戦後の一九四七年の復職にあたって、三木は宮島理事

(記録ではまだ理事長になっていない)の面接を受けた。フランス語の実力を自負する宮島は、フランス語担当の教員採用人事に関心を示したのは想像に難くない。今と違って、教学と法人の独立、権限の線引きが曖昧な時代のことである。宮島は三木に、自分の面前でフランス語の履歴書を書くように要求した。驚いた三木であったが、それを仕上げて宮島に見せた。宮島の眼光は鋭く些細なミスを指摘し、その場で書き直させたという。後に三木は、『新和仏中辞典』(白水社)編纂の中心的役割をはたし、学会に貢献した。

同様に京大大学院の言語学出身の小方厚彦も伝聞によると、関大への就職の際に、宮島の面接を受けたという。小方が就職したのは一九五四年(非常勤はそれ以前)で

あるから、宮島は理事長を退き理事のときと思われるが、フランス語の人事には異様な関心を示したというべきか。当時、宮島はすでに目を悪くしていたので、小方に自分でしゃべるフランス語を口述筆記させた。その後、小方にそれを読ませ、聞き取り筆記の間違いを指摘したという。宮島は自分のしゃべったフランス語を正確に覚えていて、再現してみせたのである。その驚くべき博覧強記ぶりはいまだに伝説となっており、後のフランス文学、語学の重鎮となる三木、小方両大家のお弟子さんたちがそういうエピソードを語っている。

10 クローデルのメッセージ「関西大学の学生諸君に」

一九二二年にクローデルが本学で講演してから、時をめぐり約三十年後、第二次世界大戦（太平洋戦争）の終結の総決算ともいえるべきサンフランシスコ講和条約調印式（一九五一年九月八日署名）の直前のことである。同年八月一日付けのクローデルの手紙が関西大学に届いていた。そのいきさつをT・M生が『関西大学学報』（一九

五一年十月）のなかでおよそ次のように語っている。

ちなみにイニシャルのみで、T・M生と書いているのは不可解で、なぜそうしたのかを推測しておかねばならない。筆者の見解であるが、この人物はいうまでもなく、三十年前にクローデルの講演を通訳した宮島綱男であった。宮島は、一九五一年十月当時関西大学の理事長の要職にあったが、同月二十三日の理事選挙をめぐって、不穏な動きがみられ、微妙な時期であったからと思われる。

T・M生の記述によれば、事情はこうである。第二次世界大戦中、駐日フランス大使アルセーヌ・アンリが日本で客死し、東京青山墓地に埋葬されていたが、アンリ夫人が戦後の一九五一年に、遺骸をフランスへ持ち帰るべく来日された。その折に世話をしたのがT・M生であった。離日の晩餐会の際、アンリ夫人はT・M生に懇意にしていたクローデルの近況を話した。

当時、八十三歳という高齢のクローデルはフランスのパリとブラング（以前に城の土地を購入）両地に居を構え、余生を送っていたが、かれは訪問したアンリ夫人に三十年も前の駐日大使の折に、来阪し関西大学に立ち寄

ったこと、文楽を鑑賞したことをなつかしく語ったという。そこでT・M生は、帰国すればクロードルに関西大学の近況を伝え、学生へのメッセージを送ってもらえるよう夫人に依頼した。もちろんアンリ夫人が同年五月にブラングを訪れ、T・M生の願いをクロードルに伝言してくれた。ようやく待ちに待ったクロードルの手紙が届いたのは、九月上旬のことであつた。

ところが大型の封書が破れ、本学へのメッセージも、おそろく同封されていたとみられる記念品もなく、たった一枚の添え書きが封書の奥に残っているだけであつた。当時は船便で、フランスから日本への郵送中に記念品が抜き取られたか、あるいは破損したかであろうと推測される。関係者の落胆は大きかった。それでも唯一残った添え書きを、当時の文学部英文科の堀正人教授が以下のように訳している。

余は余が若き日より全心をもつて敬愛してやまざりし日本に大いなる運命の待ち設けたるをふかく信ずるものなり。宇宙はこの国に大いなる希望を寄せた

り。廣大なる亜細亜の戸口に立ちて、征服者にあら
ずしてその光明たるべき使命を帯たるは実にこの国
なり。

ブラングにて 一九五一年八月一日

ポール・クロードル

本学学生へのメッセージの散逸は、はなはだ残念なことであるが、時代的背景を勘案すると、引用した添え書きは、日本が平和国家として世界へ迎え入れられるサンフランシスコ講話の祝辞と理解できよう。親日家クロードルの面目躍如たるものがある。今となつては唯一残った短文は、日本の国民に対するクロードルの遺言のよう
に思われる。

しかし、この話にはまだ続編がある。当時の大学関係者は、クロードルに手紙の散逸について連絡したらしく、再度メッセージを依頼して、その返事を受け取っている。それを行ったものは宮島以外になかったはずである。これで引き下がる宮島ではなかったからだ。かれがクロードルに手紙の事実を告げ、再度メッセージの送付を依頼

したに違いない。というのも『関西大学学報』（一九五一年十一月）には、クローデルが再送した一九五一年九月二十七日付けの原文と、訳が掲載されているからである。

関西大学の学生諸君に

青年には二つのことが必要である、その一は過去についての智識であり、その二は未来に対する情熱である。

過去は、ただそれを知るだけでは充分でなく、それを理解しなければならない、そして理解するには比較することが必要である。

未来はそれに意義目的のあることを認識する時、はじめてそれに対する関心の高まるものである。即ち吾々は実に一つの歴史に参加してゐるのであつて、その歴史の作者はみづから欲するところを為し得るも、しかも又吾々の協力を求めてゐるのである。かくして全人類を唯一の愛のうちに結合せんとするその作者は

「視よ、われすべてのものを新にするなり」

（ヨハネ黙示録第二十一章第五節）

と言ひたまひし神なのである。

一九五一年九月二十七日 佛國ブラングにて

ポール・クローデル

「愛をもつて世界を創造した神」という発想には、敬虔なカトリックであつたクローデルの一面がよくあらわれている。カトリシズムの宗教観にもとづいて、すべてを神へ統合していく概念は、非キリスト教の学生に対してはなじみが薄いのもかもしれない。日本の学生には、自己の理想とする「確固たる不動の信念」、あるいは「意志」ともいふべきものに置き換えると、理解しやすいであろう。訳者は記載されていないが、これも宮島であるといつてまちがいない。強烈な個性をもつ宮島にとって、クローデルの意志を読み解いて、この言葉を学生に贈らうと思つたと推測する。

宮島は関西大学の時代的な大きな転換期に、二度登場した。大学昇格による教育体制の刷新、千里山移転という一九二〇年代、他方では敗戦後、新制大学への転換期

である。前者は山岡総理事・学長、後者は岩崎学長という、いずれも関大の歴史に残る傑出した学長の右腕として、時代が宮島を必要とし、かれは信念をもって独断的という批判を受けても大学経営を遂行した。その意味において、関大発展の基盤づくりに貢献した功労者といえよう。関大という磁場に引き寄せられた宮島は、みずから磁力を発し、クロードル、服部、大山という人物を惹きつけていった。S極とN極という組み合わせで人脈を築いていっただけでなく、同極になると反発力が作用し、敵対する者も生みだし、離反した者に追われていった。

11 国際派としてのクロードルと宮島綱男

日本駐在大使としてのクロードルは、フランスの情宣が喫緊の課題であった。かれをはじめ協力者の尽力によって、一九二四年に東京日仏会館が設置され、開館の行事に六〇〇人の人びとが集った。その経緯が関西にも伝わってき、京都にも同様な会館を創ろうという機運が盛り上がった。最初の計画では、ケーブルカーができた比叡山の山麓で、フランス語講座を開こうということであ

った。避暑地にも利用でき、場所としては適地とされたからである。日仏学館のホームページには、次のように記されている。

東京には、すでに一九二四年に、日仏会館が創設されていた。そのできたばかりの日仏会館に、地理学者として滞在していた元海軍兵学校教授、フランシス・リュエランが、夏季を利用して、古都・京都の北西にある比叡山を調査研究のため訪れた。彼は、比叡山の地に「フランス文明講座」の夏季大学開校を考えたのである。フランス語はもちろんのこと、芸術、歴史、地理、哲学、など幅広いフランス文化一般にわたるものである。この提唱は、たちまち、当時の京都帝国大学や関西大学の教授たちの賛同を得たのであった。

このなかでとくに、「京都帝国大学や関西大学の教授たち」とはいったい誰か。それに対する資料は、クロードルのブリアン外務大臣宛の外交書簡にある。一九二六年

十月十四日の「比叡山にフランス語の夏期講座を創設」という文書に、その経緯が触れられている。

東京に日仏会館が開設されて以来、私は京都にこれと同等の施設をつくることに専念しつづけてまいりました。といいますが、ご存じのように日本の大きな島、本州は、北と南、関東と関西に分かれており、たがいに對抗意識、競争心をもって張りあっているからです。……リュエランはこう考えています。

「この種の施設には、夏休みになって開放された公立学校の生徒や手の空いた教師たちが関心をもつにちがない。……リュエランは、この考えを私たちの共通の友人二人に話しました。京都帝国大学の太宰（施門）教授と関西大学の宮島（綱男）教授です。この人たちは良い考えだといって彼を激励し、自分たちもこれを支持するし、今後は協力すると約束しました。

一九二七年一月十日の「京都日仏学館」の設立に関する

る文書にも、同様な二名の名前が記載され、趣旨に賛同する文言が書かれている。やがて建物は交通の便のいい左京区吉田泉殿町に移転した。それに関して、フランスと日本の政府の出資金、関西財界の寄付の募集について具体的な説明がされている。ただし、この学館が開設されたニュースは、クロードルがアメリカ大使として赴任する船上のかれに届いた。日仏学館には、クロードルの功績を讃えるために、姉カーミユが制作した弟ポールの胸像が保存されている。これもクロードルと日本とのかわりを示すエピソードといえるであろう。

さて、もうひとつ日本とフランスの文化交流のエピソードがある。一九四四年十二月三十日に、クロードルの若き日の同級生であるロマン・ロランが死んだ。日本でも『ジャン・クリストフ』や『魅せられたる魂』で有名な作家であるが、それを追悼してフランスにおいて、夫人らの発案で「ロマン・ロラン友の会」が創設された。友人のクロードルが初代会長、ジャン・カスーとヴィルドラックが副会長、ルイ・アラゴンが理事、会員にマルローなどがいた。

設立主旨として「『友の会』は、人種、国籍、イデオロギーを問わずおよそロマン・ロランの作品ならびに人格に関心を持ち、その作品と精神を尊重しようとし、それをよく理解し、広めようと思う者は誰でも喜んで会員に迎える」と謳われている。続いてオランダ、ベルギー、スイス、チェコスロヴァキア、ソ連、ドイツ、アメリカでも同様な「友の会」が結成された。これらの背景には、ロマン・ロランのヒューマニズム、反ファシズムの理念を通じて、二度と悲惨な世界大戦を起こさないようにという悲願が込められていた。

とくにアメリカの「友の会」の発足に中心的な協力をしたのは、あのリヒャルト・クーデンホーフの「パン・ヨーロッパ運動」に賛同した人びと、あるいはそのゆかりのメンバーであった。たとえばそのなかには、シユテファン・ツヴァイク（ナチスに追われ、イギリス、アメリカ亡命後、ブラジルで一九四二年に自殺）の元夫人、アインシュタイン、ブルノー・ヴァルター、フリッツ・フォン・ウンルーらの名前がみえる。かれらはナチスから逃れてアメリカへ亡命した人びとであった。奇妙な人

脈の連鎖である。

その流れを受けて、一九四九年に日本でも「ロマン・ロラン友の会」が設置された。当時の発起人の役員名簿が残っているので、引用しておこう。

委員長 片山敏彦 副委員長 宮本正清

委員 蝦原徳夫、小尾俊人、佐々木斐夫、高田博

厚、上田秋夫

顧問 安倍能成、天野貞祐、小宮豊隆、マルセル・

ロベエル、宮本百合子、武者小路實篤、野

上豊一郎、谷川徹三、辰野 隆、田中耕太

郎、恆藤 恭

評議員 蘆原英了、藤原 定、原田 勇、長谷川鍔

一郎、猪熊兼繁、河盛好蔵、木村艸太、木

村太郎、呉 茂一、丸山眞男、松尾邦之助、

宮島綱男、守田正義、内藤 濯、中村眞一

郎、野田良之、大野正夫、尾崎喜八、横田

徳夫、笹本駿二、千田是也、新城和一、新

村 猛、住谷悦治、武谷三男、土屋 清、

辻 清明、渡邊一夫、矢田俊隆、山本安英、
山本義雄、吉田泰司（ABC順）

宮島も、河盛好藏とともに会の発起人として評議員に名前を連ねているし、後の日本の演劇を背負って立った千田是也もいる。委員長の片山敏彦（一八九八—一九六一）は、高知県出身のドイツ文学者であるが、ロマン・ロランにも惹かれ、すでに一九二五年に友人たちと小規模な「ロマン・ロラン友の会」をつくった中心人物であった。かれは一九二九年に渡独した折に、スイスのロマン・ロランやシュテファン・ツヴァイクに会っている。パリにいた倉田百三、尾崎喜八、高田博厚なども行動を共にした。日本国内においても、軍国主義に対して背を向けた知識人たちは、ロマン・ロランの作品や非政治的な内面の抒情の世界へ沈潜した。旧制高校の世代にリルケブームが起ころの頃であり、堀辰雄の詩の世界も同根に属するものといえよう。

ロマン・ロランの会は厳密に見ると、片山派ともいうべき尾崎、高田、佐々木、谷川、河盛、木村、宮本正清、

中村、吉田などが、すでに雑誌『大街道』、雑誌『世代』、雑誌『高原』を通じて、人脈を形成していた。かれらが片山委員長を支える中核グループであることがわかる。顧問の安倍能成、天野貞祐、宮本百合子、武者小路實篤、野上豊一郎、谷川徹三たちの超有名人は、会の主旨に賛同し、名前を貸しただけであったと推測されるが、いわゆる右翼、左翼を問わず、斯界の錚々たる文化人が名を連ねている。

ロマン・ロラン夫人の主旨どおり、日本でもこれほど多くの文化人が一同に名を連ねたのは珍しいといえる。ここに名前を連ねた人びとには、立場の違いによってロマン・ロランに対する見方に温度差はあるにせよ、共通項としてインターナショナルなヒューマニズムの連帯意識を形成していった。かれらを結びつけた中核は、いわゆるヨーロッパ的伝統精神ともいうべき、反ファシズム、反戦・平和主義、理想主義であった。悲惨な戦争体験が、これらの異質な人びとを一同に集めたのである。

12 交差するヨーロッパ精神と日本精神

本稿において明治後期生まれで、大正から昭和前半に活躍した人びとの経歴をたどっていくと、組織と対立し、妥協を許さぬ気骨と徹底性に、今の世の時代と異質なものを感じるの筆者だけでなからう。本学に関係の深い宮島綱男、服部嘉香だけでなく、大山郁夫、河盛好藏など、かれらは安定した職を投げ打って、自分の思う道、あるいは信念を貫徹しようとした。本来の和を重んじる日本の精神構造と異質な気骨は何によって育まれたのであろうか。

その原点は徹底性を追及するヨーロッパ精神の影響にあるのではないか。ヨーロッパの一神教に裏打ちされた精神的な核は、妥協を許さぬ革命をも生み出したが、日本でも明治維新の「革命」を成し遂げ、欧米文化を急速に導入した先人たちの次世代は、一方ではそれを継承しながら、他方、日本文化を再評価することにも余念がなかった。とりわけ中心的に述べてきた宮島は、フランス文化への深い造詣だけでなく、日本の文楽にも一家言を

もっていたし、服部や山田耕筰もこれらの両面を有していたといえる。

他方、ジャポニズムの影響により、日本は欧米人にとってまだヴェールに包まれた国であった。その延長線上において、本稿冒頭で取り上げたハインリヒ・クーデンホーフ・カレルギーは、日本文化に大いなる関心を寄せた。めぐりめぐってクローデルもその系譜に属するが、かれは日本の歌舞伎や能、文楽に傾倒した。日本滞在中のエッセイは、『朝日の中の黒い鳥』（内藤高訳、講談社学術文庫）にまとめられている。訳者の解説によれば、朝日は太陽の早く昇る日本をあらわし、黒い鳥は、本来は黒鳥、すなわちフランス語のクローデルをもじったもので、「日本のなかのクローデル」を意味するという。

ここにヨーロッパ精神と日本精神の交差点がある。クローデルと宮島との関係でいえば、そのなかの文楽をクローズアップするとわかりやすい。宮島の研ぎ澄まされた鋭利な頭脳は、妥協を許さず合理主義を重視したが、かれはその対極ともいふべき、世話物などのあれほど情の世界を描く文楽を好んで、外国人を絶えず劇場に案内

している。この組み合わせは奇妙に思われるかもしれない。

クローデルは『朝日の中の黒い鳥』のなかで、文楽の人形遣い、筋を語る太夫、三味線弾きの三パートのうち、人形の動きと三味線弾きに強い感心を示す。

人形遣いは人形のすぐそばで心と心を重ね合わせながらそれを操る。人形は力強く飛び跳ねる、まるで人形遣いから逃げ出そうとしているかのようだ。人形遣いは一人だけではない。二人、そしてしばしば三人のこともある。体も頭もない。黒い衣裳にすっぽりと包まれ、手も顔も黒いヴェールで覆われている。人形はこのぼろ布のような影、その存在を人はまもなく忘れてしまうこの陰謀者たち（人形遣い）の集合的な魂なのである。……この黒い背景から紅白や金色の衣裳を纏い、威風堂々たる、あるいは狂乱に取り付かれた小さな大名の姿が浮かび現われてくる。……

……二本の蠟燭の間に二人の男が特別な衣裳を着

て坐っている。物語り、言葉を話す人物（太夫）と感情を表現する人物（三味線弾き）とである。まず物語る男の前には書見台がありその上には脚本が置いてある。

……楽師は長い棹のついた日本のギター、白い革の張られた三味線を手にしている。象牙の撥によって、おそらく古代の竖琴にかなりよく似た音を時折爪弾く。しかしさらに、鼻歌のような人形浄瑠璃の歌全体が彼のみに拠っているのである。この男には言葉を話す権利はない。……胸の奥から直接湧き上ってくる動物的で文字のない音、われわれの体の舌や弁が息とぶつかって生じる音をたてる資格しかないのである。彼は問いかけ、喜び、不安になり、苦しみ、欲し、怒り、怯え、何やら考え、ぶつぶつい、泣き、嘲り、罵り、疑い、ほのめかし、猛り狂い、怒号し、愛情を示す。その役目は聴衆を惹きつけることである。聴衆みんなが「おー」とか「あー」とか叫ぶのはひたすらこの男によっている。



四ツ橋文楽座外観と内部・正面から見た客席。850人収容、貴賓室も備えていたが、1926年に焼失してしまった。(写真は、宮島の「文楽人形芝居の研究」より)

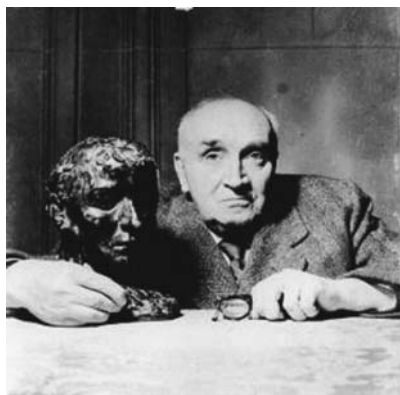
三つのパートのうち、クロードルはとりわけ三味線弾きと人形遣いの動きに着目し、脚本を語る太夫の役割を重要視していない。かれは宮島の解説があつたにせよ、上演中、言葉がわからないので、太夫の役割よりもヨーロッパのマリオネット劇と異なる人形の細やかで見事な表情や演出、三味線の音色に大いなる関心を寄せている。いわば外交官クロードルは、人形遣いや三味線弾きのように、状況にあわせて立ち振る舞い、演じて敵をつくらない処世術を身につけていたので、これらの役割にシンパシーを感じたともいえる。それに対して宮島の着目するのは、かれらの役どころはなく、太夫そのものである。宮島の文楽論を筆者は見えていないので、推測するしかないが、かれが文楽にそこまでのめり込んだのは、クロードルと違って、外国人に対して純日本的な文楽を格好のアピールする文化と思ったことは事実であるにせよ、それだけではない。むしろ太夫の役割に自分の姿を重ねていたのではないか。太夫は筋を語り、黒子を動員して人形を動かし、三味線を伴奏させる。すなわち太夫は人形劇のすべてを統括し、支配しているリーダーなのである。

大学経営における宮島の役割もまさしく太夫であった。自分で立案したものを、手足のように動く人形遣いが演じ、周囲の三味線弾きが盛上げると、大向こうから喝采を浴び、このうえなく快感を覚える。しかし筋書き通りに運ばないと、人形遣いを厳しく叱責する、三味線弾きが調子を外すと扇子を投げつける。いうまでもなく世の中みんな、自分の思いどおりになることはない。こうして宮島は仲間であったものや部下の離反を招き、かれはたえず敵をつくって、追われていったのではなからうか。

文楽は情の世界を描くがゆえに、太夫とて情によって人形や三味線を操らねばならない。そうしないと人の心を打つ文楽は演じることができない。現代風にたとえるならば、宮島はオーケストラの指揮者であった。精緻な計算にもとづいて、曲を組み立て、各パートの役を割り振る。完璧なシンフォニーができるはずであると宮島は考える。しかしリーダーである指揮者がいくらすぐれた曲の解釈をしても、人間的に欠陥があり、人望やオーラがないとオーケストラの一体感生まれず、不協和音が発生する。ここに宮島と、次代を担った情の人、久井忠

雄との違いがある。戦前に警察官僚として組織のあり方、人間の行動を鋭く洞察した久井は、一九五二年に専務理事として大学経営に参画したとき、不出世の先人宮島の「弱点」を見抜き、それを克服していった。

久井は宮島理事長が周囲の離反によって退任に追い込まれても、冷たく切ったりせず、宮島の関大に対する功績を称え、情をもってそれに見合う待遇をした。宮島として理事長を辞しても、このたびは関大から去らずに理事として、後に顧問として残ったのは、その情に応えたか



カミーユの彫刻と晩年のクローデル



ブラング城のクロードル

らであろう。久井の周辺の人びとはその処遇をよく観察し、信頼感を深めていった。久井が関大で揺るぎのない基盤を築き、長期政権を存続しえたひとつの理由は、この人心掌握術であったといえる。宮島の死去の際には、大学葬をおこない、久井理事長が葬儀委員長をつとめた。

二人の外交官から説き起こし、長々と枝葉末節を含めて書いてしまったが、ヨーロッパ、日本、関西大学の絆の数奇なつながりの顛末については、もう意を尽くしたように思われる。ただ、冒頭に触れた外交官のハインリヒ・クーデンホーフ・カレルギーは、心に深い闇をもつて来日した。『EUと日本学』のなかで、筆者はその個人的なことを踏み込みすぎて文学的に書いてしまった。ここでそれを繰り返して述べることは控えよう。

同様に姉の作品を抱くクロードルの晩年の姿が、功なり名を遂げたかれの心の寂寥と姉へのオマージュを物語っている。かれにはさらに清国大使時代に、他人に触れて欲しくない深い心の傷がある。あれほど才能に恵まれ、関大に貢献した宮島綱男も、同様に家庭的には心の闇をもっていた。しかし公人ではなく、プライベートにかか

わることは、歴史家横田名誉教授も避けておられるので、もうこれ以上興味本位に文学的に書くことは止めにしておこう。横田名誉教授は、拙稿を校正中の二月に、多くの関大年史の記録を残し、一部を封印して冥土へ旅立たれてしまった。しかしその記録のおかげで、関大の歴史を築いてきた人びとの人脈と人生ドラマを再構築し、追体験することが可能となったのである。

（はまもと たかし 関西大学文学部教授）